

幸せのありか



DISC
1

トラック2

一人の卒業生の手紙にあった言葉です。

「昔は『不幸』の主人公になり切ることはできなかつた私が、今、おかげさまで、いつもどんなときにも、人生に感謝できるようになりました。……幸せは、自分の心がつくるものであると知ることができたからでしょう」

家庭でも職場でも、つらいこと、苦しいことを数多く経験したこの人は、それらの経験を通して、大切なことを学び取っていました。それは、幸せは他人から与えてもらうものではなくて、自分の心がつくるといふ厳しさでした。

「暗いと不平を言うよりも、進んであかりをつけましよう」という言葉があります。周りが暗いと不平を抱き、暗いのに誰も明るくしてくれないと不満を持つよりも、まず自分から、あかりをつけようといふのです。

周囲の大反対を押し切って修道院に入った私は、そこが必ずしも『天国』ではない

ことを知りました。いろいろなことが重なって、修道院を去ろうかとまで思い詰めた私は、ある日、一人の神父を訪ねて自分の失望、不満を打ち明けたことがあります。その神父も、修道生活を送っている人でしたが、私の話を聞き終えると静かに言いました。

「あなたが変わらなければ、どこへ行っても同じだよ」

他人が私に親切にすること、やさしくなること、理解してくれることを期待していて、それが得られないといって、失望と不満を抱いていた私は、『自分が変わる』という大切なことを忘れていました。そして、私が変わるにつれて、不思議と周囲も変わってくれたのでした。

幸せに生きるということは、決して苦勞のないことでもなければ、物質的に豊かな生活を送ることを意味していません。苦勞をしたおかげで、苦勞のないときにはわからなかった他人の痛みをわかることができた、と感謝する心に幸せは生まれるのです。幸せは、いつも自分の心が決めるのです。